

今号の『カレントアウェアネス』では、米国議会図書館のバーバラ B. ティレット博士による、同館における RDA の動向をまとめた “Keeping Libraries Relevant in the Semantic Web with RDA: Resource Description and Access” の翻訳をお届けします。

また、翻訳記事への導入として、大阪学院大学の和中幹雄氏による解説記事も掲載しております。併せてご味読いただけると幸いです。

国立国会図書館関西館図書館協力課

CA1766 RDA：ウェブの世界に乗り出す目録規則（解説）

「英米目録規則」(Anglo-American Cataloguing Rules : AACR) の第 2 版 (AACR2) の後継規則である「資源の記述とアクセス」(Resource Description and Access : RDA) が、冊子体ではなくウェブ上での使用を前提としたツールキットの形式で 2010 年 6 月 23 日に刊行された⁽¹⁾。RDA は、AACR2 と同様に、英米圏 (Anglo-American) の 4 か国 (米国、英国、カナダ、オーストラリア) の図書館協会、米国議会図書館 (Library of Congress : LC) 及び英国図書館 (British Library : BL) の代表者からなる RDA 開発合同運営委員会 (Joint Steering Committee for Development of RDA : JSC) という国際組織が開発した国際目録規則である。

RDA の全体構成が決定した 2007 年 10 月に、上記 4 か国の国立図書館は、RDA の採用は 4 か国が同時に実施する旨の共同声明を発表した。しかし、それから 3 か月後の 2008 年 1 月 9 日に、LC の諮問機関「書誌コントロールの将来に関する米国議会図書館ワーキンググループ」が最終報告書 “On the Record” を提出し、その中で JSC に対して、「RDA への移行のための利用及び経営上の論拠 (ビジネスケース) が十分に明確化され、想定される利点が説得力を持って提示され、RDA で提案されている規定に関連する FRBR (書誌レコードの機能要件) の大規模で包括的なテストが実際の目録データを対象として行われ、その結果が分析される」まで、「RDA に関する作業を中断すること」という勧告を行った⁽²⁾。

この勧告に対して、米国の 3 つの国立図書館 (LC、農学図書館、医学図書館) は、この新しい規則を採用すべきかどうかを評価するために、米国 RDA テスト調整委員会を立ち上げ、2010 年 7 月から 2011 年 3 月までの 9 か月間にわたって全国規模の RDA テストを実施した。そして 2011 年 6 月 20 日にそのテスト結果と勧告を示した報告書がウェブ上に公表された (E1191 参照)⁽³⁾。この報告書は、RDA は現時点では多くの欠陥があるため、そのままの形では採用できないとして、

「明瞭で、曖昧でなく平易な英語」での規則の書き直しを含めた、かなり多くの作業・活動を期限内に完了することを条件に、米国の 3 国立図書館は 2013 年 1 月以降に RDA を採用すべきであるという条件付き採用勧告を含んでいた。3 国立図書館はそれを了とした。ここに翻訳された論文は、このような RDA の策定の経緯、その意義、今後の課題を、RDA 策定と適用のまさに渦中にある当事者が総体的に解説したものである。

著者のバーバラ・ティレット (Barbara B. Tillett) 氏は、書誌的実体の研究者にして、LC の収集書誌局の政策・標準部長の職にあるとともに、JSC の LC 代表であり、かつ条件付き採用勧告を行った RDA テスト調整委員会のメンバーでもある。また、IFLA (国際図書館連盟) においては、RDA の基盤となっている 1998 年の FRBR 及び 2009 年の FRAD (典拠データの機能要件) の策定メンバーであり、2009 年の「国際目録原則覚書」のまとめ役であった。さらに 2011 年 11 月には、RDA 改訂に向けて、JSC の委員長に新たに就任した。

1978 年に策定されて以来、AACR2 は電子資料やネットワーク情報資源といった資料種別が目録対象に追加されるごとに、revision という名の部分的な改訂 (1988 年、1998 年、2002 年) を繰り返してきた。そして、AACR2 に基づく膨大な数の目録データが図書館ネットワークを通じて世界中に広まり利用されてきた。しかし、ティレット氏が言うように、「図書館は、他の情報提供サービスによって置き去りにされる危機にあり、ウェブ上の情報コミュニティにおけるサービスの中で存在感を示すことができないでいる」という状況が生まれている。このような危機意識のもとに開発されてきたのが RDA であり、その開発はまさに現在進行中である。

RDA の開発と並行して、LC は 2011 年 5 月 13 日に「書誌フレームワークの変革」と題する声明⁽³⁾ を発表し、MARC21 フォーマットをウェブ上での利用に適した新たなフォーマット (Linked Data など) に変更するための検討を開始した (E1246 参照)。目録作成ツールのタイトルから「目録」(Cataloguing) という語と「規

則」(Rules) という語が除かれたことから明らかなように、RDA は、「目録作成のツール」から「情報資源発見のためのデータ作成のツール」へと変貌を図り、「カード目録時代からの表現方法及び列挙事項の直線的な表示」をベースとした記述と標目という枠組みから、メタデータ・レジストリに登録された要素に基づくデータ付与への移行を目指し、まさに大きく動き出そうとしている。また、2013 年半ばに現行の「アルファベット順目録規則」(Regeln für die alphabetische Katalogisierung: RAK) から RDA に移行する方針を発表したドイツ国立図書館が、2011 年 11 月に JSC のメンバーに加わっており、英米圏を越えた国際目録規則の具体化に向けた動きも始まっている。

(大阪学院大学: 和中幹雄^{わかみきお})

- (1) RDA Toolkit. <http://access.rdatoolkit.org>. (accessed 2012-01-28).
- (2) "On the Record: Report of The Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control". Library of Congress. 2008-01-09. <http://www.loc.gov/bibliographic-future/news/lcwg-ontherecord-jan08-final.pdf>. (accessed 2012-01-28).
なお、日本語版として以下がある。
"On the Record: 書誌コントロールの将来に関する 米国議会図書館ワーキンググループ報告書". 国立国会図書館. http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/pdf/ontherecord_jp.pdf. (参照 2012-01-28).
- (3) "Report and Recommendations of the U.S. RDA Test Coordinating Committee". Library of Congress. 2011-06-21. <http://www.loc.gov/bibliographic-future/rda/source/rdatesting-finalreport-20june2011.pdf>. (accessed 2012-01-28).
- (4) "Transforming our Bibliographic Framework: A Statement from the Library of Congress (May 13, 2011)". Library of Congress. 2011-06-16. <http://www.loc.gov/marc/transition/news/framework-051311.html>. (accessed 2012-01-28).

CA1767

動向レビュー

『RDA』: 図書館をセマンティック・ウェブに適したものに*

要旨

目録作業とは単に目録を作成するだけではない。利用者のニーズに合う情報へのタイムリーなアクセスを提供することが目的である。図書館、文書館、博物館によって収集された資源を識別する仕事は、多くの目的(利用者タスク)で再利用されうる豊かなメタデータをもたらす。その仕事は、資源を記述し、個人や家族、団体、他の資源との関連を示し、それによって利用者が資源の代替物の中を検索し、必要とする情報により早くたどりつくことを可能にする。資源のライフサイクルを通して作成されたメタデータは、資源の作成者から出版者、書籍取次店、書店、資料のアグリゲーター、システム・ベンダー、図書館、その他の文化機関、これらの資源のエンドユーザーまで、多くのタイプの利用者にとって特に価値がある。新しい国際目録規則、『RDA: 資源の記述とアクセス』は、デジタル環境に適した、相互に連結したメタデータを生み出し、図書館をセマンティック・ウェブに適したものにして、基本的な利用者タスクを満たすように考案されている。

序文

もし図書館を存続させるのであるならば、我々は図書館を利用者のニーズに合致したものにしなければならない。ますます多くのサービスがウェブ上に存在するようになり、情報資源に関して必要なものは全てウェブ上にあると多くの人が期待している。

図書館はウェブ上での存在感を得るために大きな進歩を遂げてきたが、古いカード目録の電子版を提供しているにすぎない図書館も多い。所蔵資料を列挙して直線的に表示するという目録のアプローチは、記述された資源のデジタル版へのリンクを含むことはあっても、一般的には、他の関連資源やそれを超えるものへの機械処理可能な関連付けについては除外している。列挙を基本とした目録を構築するというアプローチは、コンピュータ・システムが理解できるような識別特性と、個人、家族、団体及び他の資源との関連の明示による資源記述へと拡張する必要がある。そうすることで、利用者は必要とする情報をより速く得るためにリンクされた資源の代替物の中を検索することができる。

* 原著論文の初出は次の通り。

Tillett, Barbara B. Keeping Libraries Relevant in the Semantic Web with RDA: Resource Description and Access. Serials. 2011, 24(3), p. 266-272.